燕石十種

五十五、五十六

081
10
29

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

燕石十種

東京圖書館
和書門
叢書類
二五函
六架
一五號
六〇冊
寄

特別
よ
61
3

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

燕石十種第六輯　巻五

繪そらごと

東京圖書館藏

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

一子を添えて兄法へと雅延辞退集正親町一位公通
公の命ぜられ自注ありて書き給ふ
やどりするあかけ法どものあるを
する時のるまゐ免うつともあく雫作る銭書つけて
昼夜のめさまとそるとものるく

給馬
神馬ハ法と無ものいきそ
神馬と依社ものふ数繋
でと分るの江次第ん
幣物て賜物ともる御
神馬ハ上ゲ殿のゆ
ふ書く事ものふ記ものこれ
り本朝文粋十三小野天神ものの物と中原
長兼の献ともる文後大江の匡衡の作ふ 寛弘九年之
寛政九年返 給馬之事 七百八十四年
あれを給馬ものいつすゐ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

久しく今も祓殿の多物ゝ古刀より紙とて馬代とそのつけ
金銀珠玉とてするも竟るうる有実ゝことづけるる
奉礼と馬を画て神ゝさゝげ物ゝことゝ
又辛亥二年仙台さゝ郡ゝ蝦夷の虫のうちと号る
蝦夷奥郡の統領多賀城考ゝ
其太政官門の東ゝ立り毎年秋帝人来朝て牲醴す
おゝ若馬絵画奥人と号ゝ献すとゝ事
楊弓庭の外集ゝ出立ゝ
ゝ祓と号験ゝ神ゝ

魚鼈どゝ供る中ゝ秋北国のから不北方を御統ある
天智天皇と御代ゝ不思儀やうもちまち法をそなき
てはむるゝよゝ古ゝ考ゝ御簾のうちより也
させのしわよそ御文けざゝゝせのへるゞ社檀の
上段ゝ御ゝますゝ琴ゝ弾ゝあると百ゝれバ大嶽
冠と御ゝゝ衣冠ゝゝ御前ゝ杉ゝ
せゝる天皇御後ゝゝおゝ童舞ゝ男
一右ゝ舞ゝ面ゝ末代法ゝ書あやまれいひちや
御ゝをゝるゞゝ拍子ゝゝ小冊ゝ残さ
ゝゝ有ゝ公家武家ゝ女人或庶人

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10
ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

雑の抜をとみやおされる多仲城の例よりて
沙都を墨をなしも代くの天るよりうちてもちと小口
きいくとものと用捨なんとうつが方をも露よりも
つとめうく空たるふ胡桃のもふいとちうしまも
多仏おをるれと知るどの同一視る之建物も
そうの時方のまよくりもびと切て娘幢の石塔下
納うるどいまる中興の天るともいう腰がけのふ
指と切とのぞうふ集ふびと切なうもちと外城
物くものいをぬる仏ふん帯うてやうまけがるい又山階(ヤマシナ)
うう天之て背がかうく天物ふさうれう

一出奔しくの指よ仏へ迷惑くる方くる者るかぐく
さぞほ代ふおりいちづしあるべくと物語あれむ縁是
ひつしんくるるう天るのはうさへさをりまして
人指おが気いきまづのる今晩おととへ出せぬが
守屋大臣あとも仏法をきひまさいをふくそそも
まで見つけもせぬあ海をそりそもなれぬ本像を
ふまくくそのる城設すあやんで制くは
国の大将のさもあるへまる方
義るう つくの指経仏法ささてついた反悪人の
ふ仏法釈迦よ捉婆ふみふ方とそれ鬼発さ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

一海ふとへすき海き旅相又麦亜相をかくるの
おやまのやうふやる兒ホハ近来世上ニ言ヲ本ホ
有名ニ書き拘ともおまーてといふ
たまバ今文やおよびバ史有今吸るとも わざ〳〵
出てもやされぞ落ついてゐの若ハ合点いさ〳〵
給ふかるるをすくふをまどか海鯛の赤とく
彼の丸の中ホ孫戎紋ホ付るく人るともあり今吸るを
もうやうふ孫をおく出ませぬと仰云家中ニ志ま
有共給ふかるつくかくのをうるれど彼の丸ニ孫付る
紋ホも同〳〵いきるべく 古ねのをり亜共

が名を鯵を出てもう〳〵 魚のなを付るがをり物の
中ニ名の書おぜホ入ニ庶るとも 海豚とも赤鱝
の名と分鋪の名どとも 魚より名ハ鎌我の茶名などを赤鱝
とふ魚の名指魚の連翹 女川のさとの比丘尼 文武のさとの人 又
魚ハ名の孫の房前るともふさるさまそハ かく房をも。
前ハぜんそもぜとハふ 実の義すふそも鯔魚の名るを
とるく 俗もう 鯵も魚より名ハ孫付る人あるまことをろて
そも伯魚とハひ 鯉とハひ孔雀より 孔雀とハ
孔雀ともいふも 魚の名とふる より名付るの 大鵬鶚ふる仁徳天皇
未免名称内 隼別ふる仁徳ノ弟 阪豊も仁徳ノ名孫 ふる より名ハ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

さふいひそうふなどにも名をとゝめ修理を思のこ
いたくともすゝもあ言まて鐘供養をすゝ
きやうともむが如く思ハすゝのものも
鐘なとまてもう海のうち成なのもつゝふ卜今るるもの
すといふふんと分ずして鐘思一名鐘ま
ふでも大徹冠鐘ふう一名鐘ま
うふをうて御ふ名ふうふ
始うしそれ分て浄海ま
業道が鐘をとうてもふそひ入
居これハお思ふよう文をそつゝふれこう分

常福を男ひびひさ〳〵鐘をとうて入庫を討べき理のる
ま日本紀ま磨ふと同時福をりつ〳〵入庫をきると
ふ〳〵ふ考ま鐘をおさふ成鐘倉山をふるまふ
ふ若んふうそ成えつけひるひ等ふ〳〵ふれ志へいの
大仕当公ふい志られも後代まて成ろそふふいまひ
多武峯ふある亦の御像が明意七年ふやれる時ま亦
愛ある附いみへまう出廟ふ動〳〵ふ像やれまうふ
あゞのやまる誠ふ出ふ重〳〵ふ元指ま成ふ敬ふ
老ひまて小野のふる城後云〳〵末代ま思まて人
ふにくまれおぢよ死の玉鐘う書を引まふいるるとハ思ふ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

先非我悔るよりほかなし
竹紙の法をおい再びうつし直すべし
なりかうするやうにも書ちらし
なるそれう一画も書く事あたはず大抵
三代実録 めいく新色もあります 三代実録を撰ぜられた右まへあげ大抵
時平ノ欤 ぜうの撰といまれ其の我も古今集の
そろうのようのこうるをもくまんとそふひまで
なくふとまある宮ハ自慢らしくのようれとことろうのよう
のみとなりひ付ハあまりある絵言なれどひまぶ
おとい人ハありいそ ハ云ひ物なよ 本院のおとゞ のあるへと

大塔宮 ダイタウノミヤ
あれとも流のおとゞ時平とハ名ひ
なひあくひうしませまの物ふうほもとの大ひけずやう
いまれますとうお誤そうまでひ
中の古我うどハみうれもせび
古ノ字で物うれう先皆ふりんがうて ふいうさぶんとも
殿山の中書ふなうの山の 三塔といふハ東塔西塔大塔
とて中塔ハぶ塔ゆうぶとうれ
ふをぶりますお名権ふうれ時歌のつきものども
かすあってわりれとうの物をいひうる所ふ南れ
玄奘三蔵の翻譯しうる名ふ大唐ふかうて

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10
ガラス使用

いてる秀ゑれも夫よりずいぶんいたのかもし
るしうるうる本多でいごろぬと作らる伊豆伊豆
〳〵本多でごろぬるの沙汰あるうる人命と拙作二条院
の心得て当家うると重臣院の家をいすい人が多く
取すぬ伊豆のれふいうるいる当家ありうべ
大家てさうるの咲うるとうんて うるとも不審もまく
ら稀まり和ふうるうんなりしとよろこうる当家の
方々て法のうる弘り苦労〳〵検挍(ケンコウ)の うるもて
お酒ふんなさふ さうるうるうるふしる
人なしとようるうる〳〵感情を如うるくうんと作うん

ま居るふようたる方のやうふ書たるうて残念ふあも
む撰集ま大家てよあるとあるもへたしふいあまう
いうれいやうれ沈あるまやうの百人一首も天智天
皇より降ら時代のうさをさきへ書並べらまたると
又当るよりまつふばうり当社又の二條院より出さも
ぶしら用添う当ふと次の社を尼法師ふ長いふび
い大あるまのかんでん教朗々ふ不者ある武家の棟梁
たる地ま伐方解放ふ伝豆ふ居ら時を波をそい
歌号い何ふもあれ号ま当ふ伊豆日記とおふへ趣
て当清依とや時い色男のうるふござれども我乃

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

時う右大将とやーと大てい来の仕打どうけがくの芸それもたてあの詫びたのをうけ器もづきの名をうけ器もづきのをいろ同じをうぶせる麻をつくさせますまた私のるが芸は和尚へやつりたる分指む集ぶござれとも撰集とも詠みたうきこれへたれどおよそといふ武家のためまた大切でござる補使をやるうたるあとは北条義つる使あまり指ぐ玉ふ日々を悪く源氏のをおもうがへんとのお方よりおのいつまでもすくるうちと祖父がのやまいしゆ〜なへ〜と

みじうふ家礼どもあくふ重うなうきいとどでも公家ふ家礼どもくお方で押さ引きもて幕府執会ふ居住ふし風聞とぶみあくさうで源氏も我つ実朝うぶき武家一統太平の代おいめまくう大てやや大うな事でいござうぬ物くうふのはがござろうさやく生どる我勢強とをくるくふ一統少来ふがくふれやつでござうび物をぶうくふ当ふる流人でおうくと姫とそをりうくてうそつもうこの先祖将軍頼義義家代く続き府将軍まで武住と居（ホドコ）

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

武士どもの心ばせの少なでい人のん
ようせぶ申し申しまもしと時政公の妻で又義朝のわ〜
るい宮殿と人〜この御令をなるふんぶ城
そそそやす常で仕ひとのまぶる頼朝
娘のなるふわつひけるいひまぐて
わもるもものこと会ひるもとと時政のひをさんもし
天もと自ゆる東入るる時の先成ろぼす立史るの
ひの大ふるとるる機るこの仕事すれと始めおを〜
てやもてい年金でお年ると先まろと生ておふと
義時の伸〜てる猪りでごろるが今がなりませなん

たとのままの我義頼ひなし史いが私
おい大ぶるをおるをこうぶへるる追え〜ねむこい兄実
のら成る今ろそやせわくくもも兄実をおまるる〜とと八
有せるんだがよるど言傷で日なく
積り兄実の取来日名お放てくふそ不労でいさぶるん
だが兄実ほど大ふく申るふとぶる〜お実八身中在ぬ
言飯で死るるてんをして娘夫へ口ふり角の玉脇て
せめての念ぶる〜る孫八難部を実へり後おる
大明を亡〜たび今北清朝八清和源氏の清北
字で大唐をも源氏のる孫でるるとの美伯の書

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

ふ出たるとてふるもるくを吹人のよくやるまでござる
くらますふ居ますく吋ふ俗正坊よ云法いあらしまくく
きどどくてんぐの若元なるふそのあの鼻の折
てもふ残るされそまふ法ふいて天狗の腕ふのがつう鼻柱
をひるつたりお条の橋を足許もふく探手伐先だり云法
狐術よひとつもるふぬる今吋のつふ治りかるこざ師
の警右そるやくる拘自筋とふ分ふ輪くござつて経ふち
ふ退きく吋そるふ舟伐先とへく多いござれど天狗の
腕や鼻ふのがつそるふいござくぬ腕てんごくふ辻切ハ
法ーたのお人切とて仰のやくふもなぬ千人辻切てる

浄ろり

多別を放祖平家を亡せ大事あて鬼一法眼のおく居ます三略の巻がてるさふ娘を妙づくりやうくの吐者を召吋のうれーさ今の世で兄きむ六韜三略のこう孫子呉子司馬法尉繚子大宗問答と七書とくさらしーてあるが今の世ハ自由るふそ吋分ハ弟ふつている秘書であつくおるもむこうと今とハきついちぶれ云うまんぶ者でも上るまた吋笛を吹くくだそれさどふもうるくとのふの上ろうにおおい三州岩の薬師のやま東方浄瑠

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

理世界のあるまれをそれと
名残仕て茶師の十二神おかく
作りまると十二段といふ拵えが出んぞうの名目な
を上るりはぜんぐうしてうといもの
又古体姫の時分はて仏祖いまだ
も十二段と云割の古法と分舞妓ま云割か
て此番組と詞ぐうがこれもの
つくさみも始まるくさま十二段の
がくそや くそくといふてくる
やうな姫の出まして きいぜいといふ女
うみもござるはみとうりの速吹あふたるものをうくい
ふつくりくさ時よ つるおーもさいがぜとつふいまる
うちをのぬき打うつの人がむくる
くいのへべとつふ利口らしくもござふぬ魑魅鬼神をやひで
を打て切捨ふ作へたが云業ふをうまそれ及ぬるものと
より仏のもつふもござふぬをのれるひやめといまふやう
もるくいざまるふるひやとまふやうもるその
上ふ弁当が打物ひざまでうるふまでと強数さうくと
おーとんでいのりふせて抜で
もの不気用であふおをも

レイゼイ

つくさみも始まるくさま十二段の
がくそや くそくといふてくる
やうな姫の出まして きいぜいといふ女
が出まして 上

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

なつくりやう無きいうくいや上るう京辞枝で名の
るくるるものもあり又とんでふ
まそとの給へで忠盛たちも
助(スケ)の名ふ言の夜のうひとものあ伊勢平氏いすの先
也とぞもやさ走ると平家
伊勢ふ住玉たりしうを伊勢平氏とよそれそれる祖
るを思ひよせ〻目のすのめるを祖(スガ)祖よれるて
いもれたり無法るとふう走る姿いいつぐも承仕(ショウジ)法師の
むきうをふう油つきうとうるる祖組とふおを書ま
そが兄ふ仝侍を兵ふのとものが腰病さふる夜ふ麦

うう城登まて汗るふうとう次の先のうつりうを
云うう和よ鬼まうんぐおそろ〻ぐ陣うを
ぶきとめぐうう仏のるもるい祖又せぐれ清登そ白
河院のれたる素ふ主母とめふぐされ〻左く油壁へ
白河院ふ幸のうまそぬうごを〻て法焼ふ入るがみい
まふ祖ふこそふ女をいるとふ左ふうるとぬう
ぐるいひけう北つる死まふるまをいひけう
上の白院等〻百〻ぐうとうてやるひまをよと
仰〻まるいぬうごをび和ふ含を走ると次で仰ふ名の
たくうをたち入るひぬうごそるる祖〻人を

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

中ゟ之とのゐもの城中ゟ作らまて
義理連漿の上の句下の句を正統ゟそをふきみの夜
注ゟる城等一百ゟ[荻]注ゟるとゟぐゟりなてよ
清く聲ゟ未の世ゟ清くさうふるゟもこそ
平家物語ゟあつくもゟるのゟへゟんぐ大うそ一躰
すめぬ命ゟるふれい法ふ清聲とふ名をおへ名城
てつゟゟうそゟ聲の字ハさゟりとこそよめさうよ
ゟとハよむべゟび貴一きよくさうふとゟるがあい祠ゟ
清聲ふむゟふあませゟ平氏の旗のまゟふつくりご
ゟやさゟかゟもゟより田原荻ゟをゟゟるのふ

田原荻ゟ

法ゟるれ批ゐい弓道ふ名をかどう未深依義譜
入道西行ゟ歌数々ゟ俤へゟ史ゟり小笠原ゟ家の
弓法未代ふ永く俤ハゟり弓ゟ元のゐまれ永くゐゟる
ふふ勢田の橋で歌まれ跳ゟへ集つゟむうで返法
ゟる俤世とゃぬゟ[ゟ]ゟるゟふ明松二ゟゟ祖二
ゟりてゟへゐゟ俤のでくゟる跳宮城をきーてを
射ゟるを二ゟゟまゟりきゟたいまつハ皆をのきゟた右の
手ふとゟとゟとゟくあいまゟ兒八百足の踵乃祀ゟよ
とんぢゟる人法ふ十ゐ来三伏ゟゟばゟり引ゐぶりて
肩ゟの表中を射ゟるゐゟぐゟへくゟゟ白を射ゟる

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

中ふかく筈をくゝして立ざり
く一ぐもたゝくべきとまんの矢
おどり返つゝたゞざるをいく
じ出ざるありて三枚目の矢先ふ咽を仕切
おるゝ矢つゝを射るふ什矢も又
喉北下返羽ふくらせて立たりれど二ふ矢へ
つるたれも忽消ゝ魚のをゝつるものゝ城ゝ吉
大地をゆるがせたちよりて百足の蜈蚣
とゝひ伴ふさの二ふのたゝまるゝ
ものうごきまる城むうでとゝ拵置せふるゝとのゝよゝ

くんぐゝゝは流るのさき迚拵置せるみば矢さ知ふ咽のう筈
も出へうゝび身ふゝ迷惑るゝ矢さきふつもきをきき
ゝけゝ射ゝゝとゝふ流ゝ砥ふ仁徳天皇北はときゝ吉
靡ようゝゝゝ鉄の的を磨人の名称ゝ勅ありて射
ゝさるゝ我国史ゝも当り虎とゝゝ射ゝる矢
ふ石ゝもたちりたけがむゝでの身ふゝぬ矢ふ矢の
名城北ゝゝひもるゝ云念ゝ拵の吟つむきを射て
射ゝゝとゝはんまり桟敷ゝがきゝるとて弓丸乃
名誉でいるゝつゝもゝのゝゝまとやいそんそれゝ
龍宝ようゝ礼ふゝゝゝ絹一巻禮一ツ俵一ツ鑓一ツ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

を打ち切り給をつゝべどもつきびん
うんだとやが拍子も乗ずで名あるもの家来どもが
出てつゝふとても給一巻納めお一儀ばりつゝつふとも
でござるゝあんまり小刀代の秀包辛気辛親王将つ
が首をやて切てゝ切ぬうゝぶのきゝ有米噛
を竹出ゝ討亡せゝ付の牡蠣まゝ将つい米うゝまゝようぞ
きゝれうる儀首がもうるまでとよめるい米うゝま
うる儀といひ出ゝもうをふ外でもるるをつひ行
るものゝ金弁田原が号でござる来孫の田原の又を斬
忠綱をだとうらとさへ人ゝやすする我ホい米苞

梅雪斎玉成

の首をふいもれを縁うゝつくるそのうゝも右の
牡蠣も食ゝ酒ふつゝうゝ拍ゞ時うのゝまあひぐい
こさゝぬといもるまゝバ梅雪斎玉成
秀包の作らうむうでをは弓勢でい射をさゞおず
きでは利里の拍ふやをは腹立いはたそをといおゝく
ゝ多の海の泳ぐ所が百ゝ矢弓勢がよもうなれ
だこそ服ふあゝつなれもうゝろへ射ぬうねゝ拍ゝ
が仕合るゝゝ矢城ぬずふ三日三夜追まゝつて
泳ぐ所を射ぐ矢とハおつとうとうもあゝぬる矢を
片目ふたてゝ矢が志やんとうて居てもぬゝくと

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

坂田公時

浩柿

さづつても取上ふるでどうけまはつる拇ちよつと
目へちりがをへつさへ取上ふこさるふ拇ちがつよひ
とつふをやつ言るいふてるるつよいをものてもるい
のるひのといふないふつるすれるいをご理のるい
るとおつるふ拇を人がやつ坂田の金時まつふ新で拇ちるど
のた傑急をの弘さ乱えまのやつふやつ仔そやぶう
つと掴が智をでるが消るやつふやをど弘を
新系をので我ホが打早てつつりくをものを統概
ハ志姫拇とつふあるいふ書の一冊ふある多り多田

拇津ち反のととふ旧天王とて笠へるおのとごもの中ふ
公時とつふいあのつつう智ありて宗とつる綱とつふい新
系るあるが公時ふ心の剖ふるやう我〳〵へまひれる
公時ら迅雲ふんの剖を智もんとおりもぐ膳病をおへ
とつひれきハ弘胸をもつさくりと書さのハいまつう
を智ありとういう西ちいふでいるひが実統まて紐て
さへ膳病を智へと教へ拇ちよつすぐ
きふあらび世ごで若ふ男ん城膳病ま せよとつふ
も付るでござるあちらこちらるふ法と鬼ま三星
の矣すへさせるつう大墨城打くへての理富病の

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

うへが酒をよくてもこさい男ぶりこ次ふ粧のおも
太流おかぬきそつ〳〵九い団扇引くりくへ〳〵我おもつ
よい声の中ゑるでいござれそさ〳〵さるるもつゑまつ
ぞ主人形政迎清院のお字様中〳〵作をうけ
ぱり雲中のあ申〳〵きその城射をとされかしらハ
猫むくろハさぬき尾ハくちるそ足そ虎のおと〳〵
ふくるく声ぬえお仰ゑ〳〵まぬむけそのるき
そもれをぬえといて称ハ人がうけれませぬ一枚仰
そも名の付申そのるいよいえせおとゃそのるくそうが
ぬえお仰ゑばりそ後二条院のお時ぬえ様中ふ

あゑそ志む〳〵衰様をなやまり先例おまそ先
又形政お作付ふき射させらまたそもそのるぬへ
でいござ〳〵ぬゑのまごめのをけそのをそ人が射とめそ
取下へ落そ死そるまををつそ〳〵れておさへつも
こぬ〳〵とをれ〳〵とつけさ団ふ九刀でさいなりくり
とゃハ人を切さへ九ヶ所ケ所をつけそろをなより〳〵
なまくそをのゑ付方のうろそへたそでござるたけが猫
ゑ粧ゑ又ハ多団おふぶけそのをそも九ヶ所でいなく
一ッ所をつゑそをも一刀ふさ〳〵そろのをお一ッ二ッ
三ッ四ッ五ッ六ッ七ッ八ッ九ッとそへへそもおそ〳〵

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

武蔵坊弁慶

文をゐ初らしく見い九字の数也といふ人のあ
も有るしくこゝ小九字の入ぎ口もる
あきまでるると模倣をうてバ打るる力ハぐそう
と為ぬむきしく坊毎ゐいお条の格の如もし入
板の号ゐ初をゐしく長刀杖うまつき為信元来敵ゐ
ありこ話の優伶とつもれ義経君ゐつゝ右覚城
独し此死ゐ南ゐ弁慶一枝打逆の業ゐおいてハ天永
紅葉の例ゐ倣の世一枝を伐(キラ)で一指を切(ホル)べしと梅の
制札ゐ南ともこのむともゐるめた而今梅の
制札といふもでも分ぬるいうまでもなく七ッ道

具ともいふ為をせをまもつく格をすゐいと重ゐ
そこのけのこ切さんづちを大
体の柄でいあるまん弁の格ゐ
まきでも弁慶ゐ南用でもな物成費ゐてハ
ぐゝも不自由それゐ今ハ梅
名あり連弁の供合まも安芸ゐが七ツ道ゐ
一つであしゝらふゆゐ小なる弁ゐ
乃至で分ぬゐとゝ時ハ
拍子つて為をぬるとそつ
ゐ常在出それでを弁ハ坂川板行の画ゐ七体坊

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

小野小町

牡のそとうら見ふ京たとそ武勇のつよいつけふあ
びとよその評判我等くげふとハなるまでへ歌を
ふくるまで男のるいまゞ見ふとふ事がめつて
仙人たちと語るうまなるうへを元
きバ第伐をたゞひく洗ふ歌のふ小町の絵に似るをう
ごうてひうごうするを七小町と
云ふきいてるもない方を平ます。博多く小町の我く
称とそうまの海のうち
等集まありと乱せくまを第紙を洗ひたをば
をかふ小洗前て人事のむつをのうまをたるとある

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

さらく〳〵お目へのるいろ一向ふ
つゝたるるる角〳〵むゝ一せ
ふゝまろふくまといふふづゝふ
もあらび波のうゑ〳〵とハさぶのて波のうゑ移ゝと
俗ゝるあれで田畝をよせて波のうゑ〳〵生
茂るといふやうやうやいい詞ゝいい出べきもの
とゆのいまていい迷惑さ以往院ハ方乃中古の名人
そおりまゝくるゝつゞむぶくるゝ砂金ゑあけ
ゑせのへるとゆ愛ゆ続じて去ゝゆ方ゑま
さゝせのゑるゝ八雲沖杉みも書せのへゝ

それふるづくるゆまるゑゑみの方ゑ
ゝふゑて筆おゝゝ掬あゝゝふゑ落ゝるゆあゝ名所
ゆまる義いいひゝゝゝゝ
ひおとすむゝゝゝの沖ぶゝる方ゑ沖方墨ゝゝ沖ゝ
ま俗ゝるのあ沖ゝ文ゝ俗ふ小町の名残つゝり
よせゝゝゝ仙ゝ接ゆのゝゝるひの方ぶものうち
みいゝゝゝ百ゑ八雲のむゝゝゝゝ
ひの七小町ゑゑのゝゝまもゝ又小町ゝいぶるゝハ
ゝゑのゝゝふゝゝいをおやゝふゝ出ゝゝふゝ
いゝゝゝゝきの方の胡粉もあゝゝそやゝれバ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

業平朝臣いやはてまでのめいぶんなり源氏その絵ばかりを石山寺にこもりて書とそ
の二巻より書そめたるものなりしてその絵のさまことさらうつくしきものそすまひ
石山寺にこもりて湖水の月をみて源氏の物語をおもひつゞけたるとかや今の絵
もそのこゝろをうつしたるものなるへし一説月見るとそ
そ書はせのこと湖月抄とふ世俗に伝ふる物
の名ことさらいふのなるへしやその源氏書
う云ふ意味と伝伝と物〳〵のちがいこゝろやすい源氏

の講釈するやうなれバやすせぬが女三の宮の絵ハ
云ふもあるべくがりまたい猫の絵を云ふへて
立ものゝ伝画ふあるハ大きなる丸さんぢの猫のまゝるゞうねを
ハ絵るさまでもまるのおかさん猫のまゝるゞうねを
つかき玉ものへるを大きなる猫ゐをいまて つるのそゝ
がそけをつふ我引けるやうに出たるもがすふ
うまてつきへ来たるあいさつふおくふ立てみる
まへる女三の宮を松木右衛門の兄弟より我もう
又今やうふかきるうす 琴信の琴の宮の中ふ
松木の清つまを我とんとけたまハ鶴ハ枝ふとり

たきび拍いちふをおろりそいふ女性川村拍校が
拍木の鞘いさくふの本絵るる城うめとるあやまを
るれむむいちふをおろりそうふべきうとさる人
ま尋たれをいやや女ご玄城ん
むの附るれど此琴の前の井ふやうのるもえべ
ごうればさくふ此附をつりまりをけも祢されまい祢
ふうめの花のトふうきくるもあふ祢ふうい
仕たるりておうれをと笑ふくうへられよう
ふくる笠るきるい設ぬがよるれどふあまうふちごふ
るいちまでもきのどくとすべらうの繋うきやり

なうくそうもあまりくふそうの書庫ふるる
女性私ご面のかねの表ごるるとうがくみの
扇をおまて拍くうしありきふのちん女の扇々
ふくそれくぞうそん女ごつふ原うそうくそん女の扇
ごうふふそうふ羽撓(ハンセウ)婦(ヂヨ)をいるる女性私筆をうくふる
秋の扇れまでうふふくいるまと私扇いあそんもいふ
ふいるまて扇ごうり拍ふのあるる城ハ笔も芸団のかねを以今
まりのるれ仏やつりまやぬとい人をかえふる鬼女の
面をもの名伐与ごのるでつけうふいつもうも同まる
そんあやりんといそうまるそれる遠ちりそと

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

見ハ葵のごとひふ立葵の古名（ミヤストコロ）の如て怨霊の生ける
鬼女と葵のごとく人の遠葵共いふやうにみやま百の
怨霊の鬼女成大般若経をよみて消失せ
声ふるひてありしそのとき此女の名ハ岩女と
いふ由也又ある時思ひ入ありてこの
鬼女の面ハそのまゝ寺にとゞめおかれ
しが小町笠或ハ女形のくそや作りんそ
も居るびくにの今にとゞく十年

ゐとせのうちふたゝび彩り修れでむこの絵のうつ
とるく今画のそこもあるへくがくぬをみる
多羽法るへくと多羽ゑの男を出た扇といひる
我ホの姿覚敵俗ゑせなひくより代く修て彩るる
ゑ寺門ふ迷来ハあまり粗ざるすぐるもあれも見ます
ぬもう老ふれるもあつぢんもるく大ゑげも
るく英女もるく英男もるくすゑのあれる木のまく
といふやうる此寺ごとくいふ説ハ最明寺殿例ゑ亜雪
中の姿まて立出ひきふ彩くいふ説ハ
ごまで西行法師と一和ゐきいふ居て出やりくとなるふ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

つるでるのてあそるくりゆりくと西行とつまだちて号令
おあるさがヤシくヤシ此坊主を絵かいさ不ル六十あまりの古入在
とうへますするがつまらぬ世を去たる時が三十七年そこ
まへのるれだ色るの男んるる活きるくいのある
はる玉づさが右うさぬいたもくと又当縁のさぐと入在
するはる三十一年で仕廻ましたが古年紀ル田乗越そ
れぞ五ル十有余の古ん入道と書たハいざとぎゆ
さんふ書るをるが彼れ我のすの木のうちひよ梅桜松
のるもあって黄ル偽文とふ上ふふ梅ル松ル桜九
と二人兄弟をつくもも梅いとびさくふふうる世の中さ

行とて松をつまるるうんとそよ神縁あるくの世ま
とつぶとりまくへうあやル松井梅と一対ルよ
も松毒と一対とう梅井と一対ルするハれとも松
井梅のこと一対とするる画工のるのわやくさる
をとる人作りき結ぬとるそう孤家などの一人話まあめうずる
つまでうるるとる後の学もこ芸能ともさ
すうるうりてゆうるるもの梅作り小西行法師松隠集
ルるれが油とでごうるの梅作り小西行法師松隠集
ルりくこ元禄ル庭川うばうくきつみせもの

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

今時の私人抔と称するさの有さ様ではない
法然流の称もそんなものよりもむしろそれを「元の」
の法ろなるを称信志ばかりとそこそこまりつまた
ものも通世（とんせ）のものゝ栄（さう）のそれも二ありせず
として本のままさのこと称ていふらぬ我ら
称信の法ろの侵犯さぶ二ふさぶ二ふ風流
の称法ことなりかれ論ぶ西ぶ二ぶかぶ二ぶ
新古今の額さしぶ西ぶ二ぶ
女の法ぬのとぶ二ぶ
ものあるか今の西院流（さいゐんりう）

ムばてぶ二ぶもあるいふぶ二ぶ
てぶ二ぶ負てぶ二ぶものぐぶ二ぶ
せぶ二ぶ末代の人いあるへき
でぬぐくぶ二ぶものでぶ二ぶ
世出来る御法ぬのとぶ二ぶ
ぶ二ぶ後のぶ二ぶれとも法のこぶ二ぶ
侍り抔云家流をぶ二ぶ
ぶ二ぶるが如ぶ二ぶ
読をぶ二ぶへなりぶ二ぶ
著し著ぶ二ぶ

通世（とんせ）の御（きや）

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

そのち宗祇苞蕉いつも我らまるよ
ら也も学ぶとぐまし給のたまひのきてふいづきも
金弘自由のそのどもあへうら
らうともまづ金打が才一でござる世を捨てやへ入ても
くものがるるきバ世へ又出るハりまぜぬきりるれ
バ仙夫叙述が中ふ俳記するよりおゆいるるとんへ
まするきまふ舟てもをのあり
ふへ舟てもなへるハそのをのあるとそひの舟西行
るともちもる百韻ご紙の祢うを頼朝公ふ
そふれてもおげもる門あのみごもふ中まる

と詠んだのがはじまりでハ仙人ともち
も生ふりをもふまて百韻或ハ
ると別仙俳もおるくらくふ
ハあるうくしまぶがそうそ
そのとあれバ狐のあづさ隊
が九条ハ病気ゆゑとハいふまで李夫人
ていふ事のあるをそのこと学ぶ蕃慈童
事をの画ものうる用の稽古共蕃慈童
事るゆへ蕃慈童と よごれ僧の
も八百余年をうちうち彭祖

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10
ガラス使用

と人以も彭稽を列仙伝のせく般の事七百
余年月稽主乃ち去而りもとへ帰ること七年
余年の人流沙の西ふそとあもと彭祖凡八百余
わもも八百余歳といへども稽主の時をるなりを帝も
大小彭のそのく同人のおふいわやうりうるへ
稽主の室をそなやまもて沙丘の上成ちくけふ
羅ふうり鄱縣(ヒケン)とふまるふ
得ちそふさぐ〳〵竟ち第五系の孫
為て流ふ〳〵ふとふ上事伝(ノベ)傑ち八百余歳

上意事かくのうちあうて書先の姿をとふ
事迫くハ大年記の十三年小出きり南陽の鄧縣の人
風俗をふ出されど事文勢(ジブンセイ)聚統(シュウトウ)集二十七こありこれ
これうあつめる説るれも意事つまふまりて流れ
て長寿を強ふるのふむめでたき
画いまりきとのこと書ふる人も
いひくおもわれぬまべて仙人長寿の数いめでたく
ものどもそこふみふる王質(ワウシツ)ふ山へ入く碁打ふるうち
小斧の柄がくさりとふふ事ふ
ていの百年でも世の俗こ日なでも浦島ふ雄翼(エウリヤク)

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

の御代ぐ 淳和天皇の天長二年まて三百廿余年
ここく放里へ帰りたれど家も故山の友もるらしよ
浦も島も海山のるすて浦島と名ていふ浦島の
いやき一人の残るぐ人ら世界のかず数百年を送り
て有々ふ物ても語もるきてるるや東方朔ぐる
列仙伝の西王母ら漆下まられむ三千年ふ一度らる
桃核らぬすむとへるより九千の実とへるも実里の
化生る所ゆく実里を見ざる二十年と大位(タイゴ)ぐ
武帝ふ告なるよ 列仙伝ふあれむ西王母の桃の
うりさゆく九千実とへるも人るふありしるぐ

妙相也さのごうゆむべきゆぐ西行うど丸相
俗成仙人ども ゆて多くも今晩こふふ一本の油のまち
びふちうく多くのひるがわりて墓(ハカ)先生るどを
列仙伝ふするぐち候先生といへるこうる多元来
久々のするれふ小ぐるもさで生てやまされうぐ
くれどをふかきたるふかしと遠王母相物ふ久まぐる
里書ていひろうぐ物そうするの色るし今の学も
更びつひあれどそるつひ続物なの頂ぐの
くちを吸出すす列仙伝ぐ
つくて人るる今の学丸

うるし残みそそぐがごとくふりて白うるすごく
毎日吹ものてもうるし吹ものてもうるし
書き布巾絞りし油桶の大きなるおほいなる
琴うるし朝ふのるる黄も又赤朝ふのる黄安い庶民
す廬放も来ふのるとこうるし露ふ赤と貴き庶民と
どもひてうる房い壺公みるひて壺ふ入多人うて
注ふ九月の植赤ふ苦て菓(ユ)菓(ユ)会を猶ふうけうき
ふみがりて菊苑油浅のうて福成さけし人露
ふ壺て笙を吹ふ生る喬をかもつるうるふ赤
仙人のうるものとうて万家々の船(ふな)れ大唐ふ赤親

仙人のうるし

井蛙抄

おかつけるうて仙人のうるふ露ふ物を
おかするとうるにの注ひうる井蛙抄もあり又露
ふ赤て物うしい丁令威ふ注果ふ赤ふ
あまで瓢のうちうる豹をもつたる到仙術うる
うへ神もむうより世ふいひつるふ赤うる法九分
ぬのをもきみう様をあまうるとバセうる今もよう
もうるうまふだなつのひうて初年が石を羊うる
うる仙術とうで大そうるものうれぞ
業をうれぬのうやうるたびひふあうをいふ
久来の仙人いやそれでも昔を成

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

不找給おもかきく人もそえますがむごくく一角仙人がたくくまつの例もござれども足引の山の桜潤の出ぬのやふ桃を育やれ木す花さぢるなみなぐひのむう吐のあるくるすく優言ふるくもあれども言ふをとぞ拘だとて一ぬん仙人ぬ花ぬるるの女のせんなくして落るをとゞが白いとそなけのおれるをい足付うそぐさそそふまぐくを見て目をますく雲のうへふ高ぬて仙人の画ふ参ぬふ思線をあぶふかくとものるを拙ぬざりふ色をうーるるくおくぐ

ウキ給

の不をとるきます何も参ぬふいるさぶ雲のうふ高ぬ斗一号ぬおるかふいるる周墨でござるるやらを浪くとて乃雅せんくく女我こふうく雅だで久米の仙人とふさうふんくざりき板大庫給とふとるのこふふんくて鬼社会備をおもくの作の一流ぬて拾ふふいぶるるもえんくるもの光琳乳山のふいふ乳べくもるく画ぬれバいる言保乃まうのるそ七十年ぬふくぬるものもこまろふ先ハうきいはぐくてもるくぐれたくぐく給とよべくとくる人も給りきをもの和ふそん品しそ行を

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

うつとうしいやていいどぶつ福禄寿ハさうやきそて油ゐへ
年枝天もゑまんぢう波のうゑの残まふけとひ
るさるも凡人ふけぢうくまへうとちまで
る神んひるをいまれをそてあそびとあるこふをも
徒のいたまる布也るゐき枚のとる銭の祢みのこるめさめ
とてふ方も何のるやう正月二日の初曲免ふをき
麻するるふいく麦ちゐひそて悪麦銭若麦まあひ
まるれど一そのひけなへぬ方ことをみ祢ゆうとそ
いうるる祢うまやるこのうゑみまや涼ふ
のふぬ舟やあるべき表のもでめるもをべく

以文のおとつふものハなくうるるとのなれど別してんの
なへぬ方也上うふまてもかうまてもけますなう
をおもうぬとものハ政事ゐざふやもかく以文とて
いう祖もあるまして辛酉のうち十六なをとくをゐ
て汁うくせをいう祖もまるる大うふハ男く安の
らぬを利おてて天あるものこ此方斗ぢうでも来く
のとのても知てなふ老も姓あるふ方とりゐでく正月朔具
夜ハさくまて二日の夜をいふもをもも自分のなうりまして多代百枝とそそびるるこびき
まとこふそうのまあをふまものよい

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

よ
61
3

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

燕石十種

六

東京圖書館
和書門
叢書類
二五函
一五六號
六〇冊
特別
61
3

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

燕石十種第六輯巻六

東京圖書館藏

栄の序

原武吉ハ宝永のはじめより三絃を好て吟ずる人之あり
品川の楽楼にて三絃の事を教ふるとぞ聞えしが
ほどなく歿せしとぞ此書を
行のうつゝ清ふまゝにて自筆にて例の十種中に収のこす
が捨まほしきを購ひ得て

文久癸亥初冬

活東子識

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

浄瑠理　三絃根元
半太夫　操座敷物屋敷
　　角筆一巻也　一冊面

一 久世氏　一 加茂氏　一 荒井氏
一 紀世右衛門　一 佐々木市郎　一 十寸見河州
一 山元源四郎　一 猪原氏女　一 市村羽左
一 尾上菊之助

小野のおたふく織田家の侍女となり信長公の浅漬くの
ごとくより一命の策のおかげに独り住もて居ながら大岡
秀吉公の篇中に加藤清正公とやうやくめきひろまりそ
百抱さゝの小歌は大岡つゞきのお通かしこまり夫前の長が娘浄瑠理姫宮仲うるうる文弥
のあらもくうかゝれ史歌源氏共内分ばかり書ひそめける
友ぞでそゆかやさうくそつゞる小曲可申候間浄瑠理姫の琴の
形柄袋の長がもふ一ト枝宛の御所ひろまり姫のことく思ぞせの事ぞ筆に任せ御笑ひ給へ源氏

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10
ガラス使用

十二段といふ物につくりて上覧ふ又大納言を出だんで
業能久法伊勢物語ふ似うとて廃れさせ給ふ岸寺
今うて宮殿接ふ当代と分させ給ふ出来て沢角
滝井を接ふ俗人侍る女房ふ平曲要所ひきて又三位に
多給て浄うる宗会て一曲と云ふ名物
勢井角ど云ふ墨ふ細松宮ふ浄瑠うるをぐら会也
うくいうか宮殿と加へ今ひとすぢ元禄長十郎
とう名あり 京都東ノ洞院目黒座 浄瑠璃ふ曲と侍る妙
と云ふ人うて也と云ふ 初めぐうとう曲と作りたん

さふふ宮殿と南う宮殿とふ妓女の集ふか侍うん四条ふの系
ひものて初めて浄瑠璃十二段うとうて
夫うけ也 都一流也とうて
みうるに始うるとうて尊
義坊と作うこれふかの十二段乃浄瑠璃ふ
うれふつうり物語うふ当宮と浄瑠璃と号して
宝暦ふある物うて都一流ふ
浄瑠璃ふ動の源うに土家高家ふ
杉山丹後掾ふ云町人滝野の妙也ふくんぎ浄うて

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10
ガラス使用

作米より奴婢等之(これ)を
以て東征の一風と成(なし)又小平太を
助命と仰る旨より関の孫(まご)
清玄と(この)六段目の
是(これ)なり又半太夫
初て揮(ふる)ふ所と
上京して丹後様と改(あらた)め小平太薩摩の様と改
すると

相(あい)変(かわら)ざる事

丹後様 る 伴(とも)内

同 花菱様

丹後様中子

長門古史

薩摩様

薩摩様中子

小平太

虎之助

同

清玄尼

清玄尼実は

東市之進

同 小右衛門

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

長門守吏中る　なまこ壁事
肥前掾　肥前右吏

肥前右吏中る
源　中吏　る　玄同　早世
布留姓本入名て栗名と

る　中吏　帯刀
源中吏

る　中之助
源名て栗名

中る　初右吏　月　吉右吏

中る　吉右吏　中る　初右吏

中る　中し亜　門　文次郎
右中と亜い文祖の栄師匠と
上手と世に称る

中る　元紀河東
布留河流茂十郎
中る迄中る源中吏中る

中る　意教
法席法

忠右衛　早世

中る　河内大掾
多文　源和泉守藤原清海第新し改名

中る　蘭州
右二十日法号を改師業人るれども年

中る
双笠　ひさわ笠
初の栄中る源一統ト称

右河東京教忠大夫門中て
中面至而上手天満屋茂左衛門と
いへ〳〵布留河流と号ふ魚服者のるに芳平師を
堺に住風と

生業雑流れ物名

一 源氏十二段 二段目 小六ぜんみ幕 二段目 笛の段 四段目 雪の網
四段目 きつねみの段 二段目 浮世ごろり

一 生贄 二段目 乃至

一 橋姫 二段目 乃至

一 平松 二段目 乃至

一 与橋高根 二段目 乃至

二段目 乃至

一 和泉が城 二段目 てうず

一 日蓮記 二段目 山入の段

一 丹波与作 和段 雪宝の段
二段目 おせん茶だし 二段目 馬子の段

一 浅黄かるこ茶筅 二段目 軽おとし 奏
四段目 雪のてう

一 宿屋遠国笠の内 二段目 大和ぶり 二段目 京ことば

一 女庭訓 二段目 役の行者 二段目 大和物語 二段目 思ひもぜず

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

一 糸今和歌　和歌　秋成角力物語　二段目　贔屓桜

虎が掛乃行

一 古朝ゐ十境　二段目　花ごよみ　狂言

一 ゆまの高招牧場　和歌　物せん狩　二段目　浅茅八景　狂言

對面和事　所作事　かつこの段

一 出世盛久　二段目　法華長講会　狂言

一 平安城都定　和歌　茶筅売　狂言　弓の段

日　みさをの花乃行　二段目　天王思　狂言　傾城新町

一 金盛揚げ　二段目　清玄いのり　狂言　清玄桜姫

清玄尼　花の投扇ト出ス

一 かけ清雷問答　二段目　乃行

一 百代時津風　和歌　かるたの段　狂言　清兵衛乃行　二段目　重好心　狂言　悪婆の段　狂言　打掛の段

清兵衛尼

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

一 [illegible] 初段 三段目 頓阿藤衣

一 吉日袖留我 初段 のがり給ふ 二段目 女房ゆゐ

一 御門 かみよ 四段目 梶系いろき 三段目 恋無常の段

一 今朝留我 初段 言名ごや 四段目 杣灯紋ぞ 三段目 色の段

一 貞任ぜめ 若事ぞ 伴 みまいろき

一 好色よし物 三段目 清元八条 いるりくえぢよ

一 名ごや 三段目 かうき虎 伴 ワキ実ワキ多勢

一 山落合待ち 三段目 花筏恋の段 三段目 [illegible]の雪打

一 和国六人 伴 小袖振 天狗ぞろひ

ワキ虎や方々実勢

三段目 嫁女の段 伴 清明行

一 かうきでん

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

ワキ所作ござる事

一 井のかしらぬう女
獨かぐら日しん 歸心猫まく

右之外之流い焼ものす

仕候日

作後事の部

一 初段しん物天王之事 さがりをおきはぐみおろ

一 重り之事 せみおきの日
一うもい之事

一 ちり之事

日蓮花せみ丸
一 山入之事

仕候日

一 切合之事

一 まれ事

公家の時

ワキ事の部

一 笛の時 一 四季の調 一 ちくさみの時

一 敷紀の時 一 和泉の城 一 定もとの時

一 日蓮就 一 せみ丸

一 清明行

三経後キ由緒

同 春斎
丹波掾お方
源泉 盲人
平家の事
玄春
源泉の事
八帝之清

源泉事
天下一平春
公家之事
山伏源左馬 肥前永岡
事左史氏お方
又八事
山長源帝
山長源帝師匠
又八事を助ケ
空入助之通也

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

妙なもので おずおずと近づく探索の一人を
安き世ぞとなげうち 犀(サイ)の角ふり捨て 虎の牙(キバ)抜き捨て
死に孔雀の羽毛を愛する我が一生涯 甲斐もなくて
一歩ごとうつて歩める毛抜きの 因果をおうたる身を
ん今ぞわかりき

世にもきみ悪い男のすがたである
藝が身となるまでぢ 志かも ぬ
身のたつまで 浮名 立ち
かくて 徳川方へ 送られ 市村羽左衛門上

菊五郎 自ら の 外 ま る 乃 ち 悪 い 様 を 好 ま れ
梅幸 なれど 好 き ま す 藝 の み を
菊之助 ごりぬ

右書面 徳川 頼 恐 のみ 一 家 の 自 害 後 送 ら 芸 を
ま る な ど 豹 変 夕 陽 ま で 一 の 身 辺 そ そ の 志 を
もん 汲 の か ら み を

かき 手 汲 の こ み を な
折 ま よ び 手 ま
東 武 古 史
昭和 年
巻 十 八 冊

仕一冊 左 そ の 別 添 写 し
自 筆 か て き え

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

俱舎論疎

釈迦仏が因なくしてのみなりたまふ
因なくしてのと説(トキ)たまふ本なだに仏おはしませばこそ
人間のなどか仏おはしまさざらんおもひでのも浄土ぞの
仏ぞやといふことぞ因なくしては事とゝふ
もとゐんなりとあることこれ物よりてこそあらわれさだ
まれ文の心もこゝろぐれに学問半ばにして一よりぬるぞもいひ
あてらも大きなるうそよあかうそとはうそぶ仏やや
せ多ひとやや又うそぶ方位のうそぶ当こゝろやや発

やうすべて六道四生の衆生は法の界より起りて六道四生に
面する因なりといふ世界に仏の三千大千世界のうちの
乃至事世界をもあらいこそ三世五時の人心おこしぬるが
教主にてあるしんを教世主とそさうなひがことよ
楊がのみて天一のうの真純な強い教えやせぬよいも
ありとがしもが当面ふ教主釈尊のいさづら者の
世あまねく九人を迷うる心といふうそぶいふうそん
さうさうさうと一事ぶに書たぶぶで松風の音二首ふき
その一ふしも形一墨絵の風のさうてもう海やなりだが

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

[illegible]

七月芝居風流踊

七月芝居の月や法灯会の月や法灯場

雨義舞　鳥舞

天冠舞　箕神楽

安く御ぶやう法灯場湯湯気

湯気そう〳〵おざるようて

いのるなり又来七月芝居の踊

おやすみの月芝居に

よって大切おそくなりとのひけ

一七番指定番表八番裏八番

又七番よって若衆会て八番

八番ほめ伊勢音頭

す世せ八乙女の舞うと

室町

[illegible]

庵主

[illegible]

木下

[illegible]

[illegible]

二一

[illegible]

[illegible]

葉の雨

[illegible]

[illegible]

香石

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

言安

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

上の寺

織屋座

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

小堀氏左衛門尉と云茶湯中興
の一人也年甲斐もなき行跡
小笠原氏ひいきせられ
より讒言にあひ
ける
又いつれ麻布長坂小笠原山公爺左衛門
尊父なりしが主君を諫めて
やめて麻布に引込しに公
左衛門を召入られ
唱ゆへなりしとぞ
其流の津
と

れもと順之法に妙
八十六翁の作と云て津
なきを其子宗伯
感んもと千鉢
妙を重かれ
云ふ古代ものと
翁〳〵と云ふ
其ゆへ
志津

教年志と云ふも生涯不肖ながら遂
不成就ながら強ひさゝるものと斗り元文元辰八月十四日おもひ
寿の字共二字等ふ諸書ふりし云ふ
浄るの願のもと石碑一叶土数程ふ
と聞せつれ年二字ふ
やうなることふ東大拓長清平
為ふ作れ共ふ梓ふちもふ世ふ有り
哀のまゝ人ふ人形のやうふて梓ふ
指図ふもふ人ふ集ふ動ふ大文字ふまのし斗れ

小ふのごとく斗ふ
絶うりゆふこそんも荒玉
ふ一下流し六阿先生ふ
てふ相ふ土ふ初阿天生ふ
動阿軍切会ふ人形ふ
うふふ山入ふ
ふ浄うふ人形ふ
元文阿辰ふ六ふ浄ふ
ふ人形ふ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

市川國秀　西川寅秀　佐々木市秀
杵屋佐八郎　杵屋喜三郎

三絃濫觴

晋(シン)ノ阮咸(ケンカン)世ニ不遇(アハズ)ツレ〴〵ノ日ヲ送(オク)ルトテ始(ハジ)テ作(ツク)リ出(イダ)セシ器(ウツハ)也近世(ゴンセイ)全雑戯(ザツゲキ)具トナリ妾童妓女(エキドウギジョ)ノ弄(モテアソビ)トセシヨリ自拙調(ラツブクラウメヤンラベ)ノヤウニ成リテ淫乱(インラン)ニソム

ナカダチノコトニモテキメルコソ是非モナキワトゾ

右晋書阮咸傳下畧

一シテノ口コキウニ合
一ニハトリゴヘ
一相手有ニカヅ有
一山寺舞之事

一公前カヲリ三下六ニ弐ノ一(コハヲバケ三人形体ノ内事)
一珍弐十二口伝

十二調子

正月　平調　二月　勝絶　三月　下無　四月　雙調
五月　鳧鐘　六月　黄鐘　七月　鳧鏡　八月　盤渉
九月　神仙　十月　上無　十一月　一越　十二月　断金

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

但十二叶ふあてくくときい字の時と平調ふして更ゝ又雅あり少あてや叶ハ

一雙調春也木唉ノ声　一黄鍾夏也火歯ノ声

一壹越土用也土牙ノ声　一平調秋也金舌ノ声

一盤渉冬也　水唇ノ声

五臓之聲之事

肝東春木青角目双調

心南夏火赤徴舌黄鐘

肺西秋金白商鼻平調

腎北冬水黒羽耳盤渉

脾中央土用黄土宮唇一越

又六律六呂ともふ

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

六律ハ黄鐘大蔟姑洗蕤賓夷則無射
六呂ハ大呂應鐘南呂林鐘仲呂夾鐘

佐山流
七挺獅子由来

芝居囃子の一帖ハ城北下谷池の端仲町に住する
老翁なり 翁ハ源四郎と称し 叔父なり 幼年より笛の遊藝の世に名を
ハせし胡雪蓀と云ふ師に就て学ひ 玉ふ事 数年にして
その奥義を極めたりぬ 洋画川挽枝

其三絃小志満と云ふ 此人ハ元佐山流の市川流と云ふ別派を名乗れり
此流ハ三世えち右衛門より始まりて三世えち右衛門にて絶えたり
八十歳余にて没したり 名ハ某と云ふ 又時々俗謡あひめ手
三絃小志満と云ふ 七本調子ハ事と二四曲ありて又
双調子ハ申楽謡ニ三絃の元組なり 杵屋勘五郎と
いひしものハ我元組の佐山撥捌が中より 勘三郎と称せり
完来申楽東中務と芝居俳優ハ名のみ
大樹家のものにて 雅楽部の勘五郎と云ふ
杵屋勘五郎ハ 佐山撥捌ハ七挺獅子をよく
秘曲と云ひ手後ろ伝ハるものハれい今ハ絶ゆる

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10
ガラス使用

人をうつ事いまだ年若くして藝ふかき名源キ
ゆくゆくはと仰ぐを我已ふ八旬ふのうち胡露ふ渡るべ
のみこうぎかくこゝもあまたと云ふも若のうしはなれい
古代の手跡たゞひとり遺りて今あふ不用とはそも
て幼ふもそのたゞ敬ふ注してまたび年ふも
寛ふ過ぎ比中村仍九郎平の方に来りふ歩行てはを
古代藝術の事にはなはだ動ふ先祖
上覧ふ附申ふ新發意の事をもめて永錢永樂通寶の略
五百貫文下賜ふしふなと御ふ七歳ふをはじめ

今ふ名ふりのとなく歌かりしきなど御ふをひひて
平の先年撿校津国川ふ仍りし事をもめ仍九郎
呼びふ在ぞさらば城ふ参んとふ
彼ふ到ふして参ふ矣のそひ
御ふよ下飛平も御ふおぼつかなく
分振舌奏まてふ仍九郎も平を感歎
ふこうふ不覚涙と御ふよ年けんなんて
曲と称して法師ふのそもと新ふ
年老ふをも「かくこゝもと」ぬを

世事を廃して申老新發意の一巻お筆して我
一家のために伝へんと欲するもまたさもと
手かくもまたとゝめよとくいふ仍て筆をとゞめぬ
世不飛勤三師伝九師の知識まで又七師まで
添ずるの知識なくして古実に伝ふ後そうん
彼と称さ老とをもて七師の事の意を書伝
古義と会せて老とをもてことをもうを師まで
て六祖安華八祖会までの知識に
尾上のうつりをもて添ず新ふも藤原添如まで

しく老命を不顧て老をいのち拙ふ永井のうつり
三経の違へをもて世尊の御心をうかゞ
その意をも老年新参の為れいをも坊性
法をもさふいをもかくおもふ
ゝおもふもん

明和四亥秋

原武吏
行年七拾七歳

六一冥の序に老ひうしの自飛の拙命の
我が年の程より藏ふ新さうしあちのはゝの藏の内ひで

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

岡安一統系図

元祖

岡安宮部之助

宮部之助実名

後人

岡安小宮部

小宮部実名小宮部之助

岡安小三郎

後南浦改

同　新助　実名高村孝治
岡安良助
同
岡安新八郎
同
岡安源助
同
岡安藤九郎

小三郎　半子素人
実名石龍改
岡安南柳
同
素人実名宗武改
岡安原篤
同
実名古人林屋源平衛
岡安扇朝
同
岡安二象

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

同
岡安友次郎
同
岡安喜代
同
岡安英南
南柳半
改名
岡安小三郎
同
改名 孝人
賀古田島ニ住

同
岡安南浦
同
実名玉吉改
岡安南窓
同
岡安以称
同
岡安加称
原宿ニ住後南柳半
岡安幸次郎

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

同　岡安春平殿

同　岡安源之助　李教事

源之助妻より後前妻分

岡安文次郎

文次郎妻より

岡安妙子

同

ガラス使用

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

岡安吉之助

此分家ハ前妻ノ子ニ付前妻ノ名ニ成ルモノ

壬午歳新年国安流之体家相続之節ハ前妻ノ名相続ニ付別書有之万端ハ仍免状ノ通

寛政二年戌年十月九日

岡安小之助殿

岡安南柳判

文久三亥年十月廿九日一校了

活東子

よ
61
3

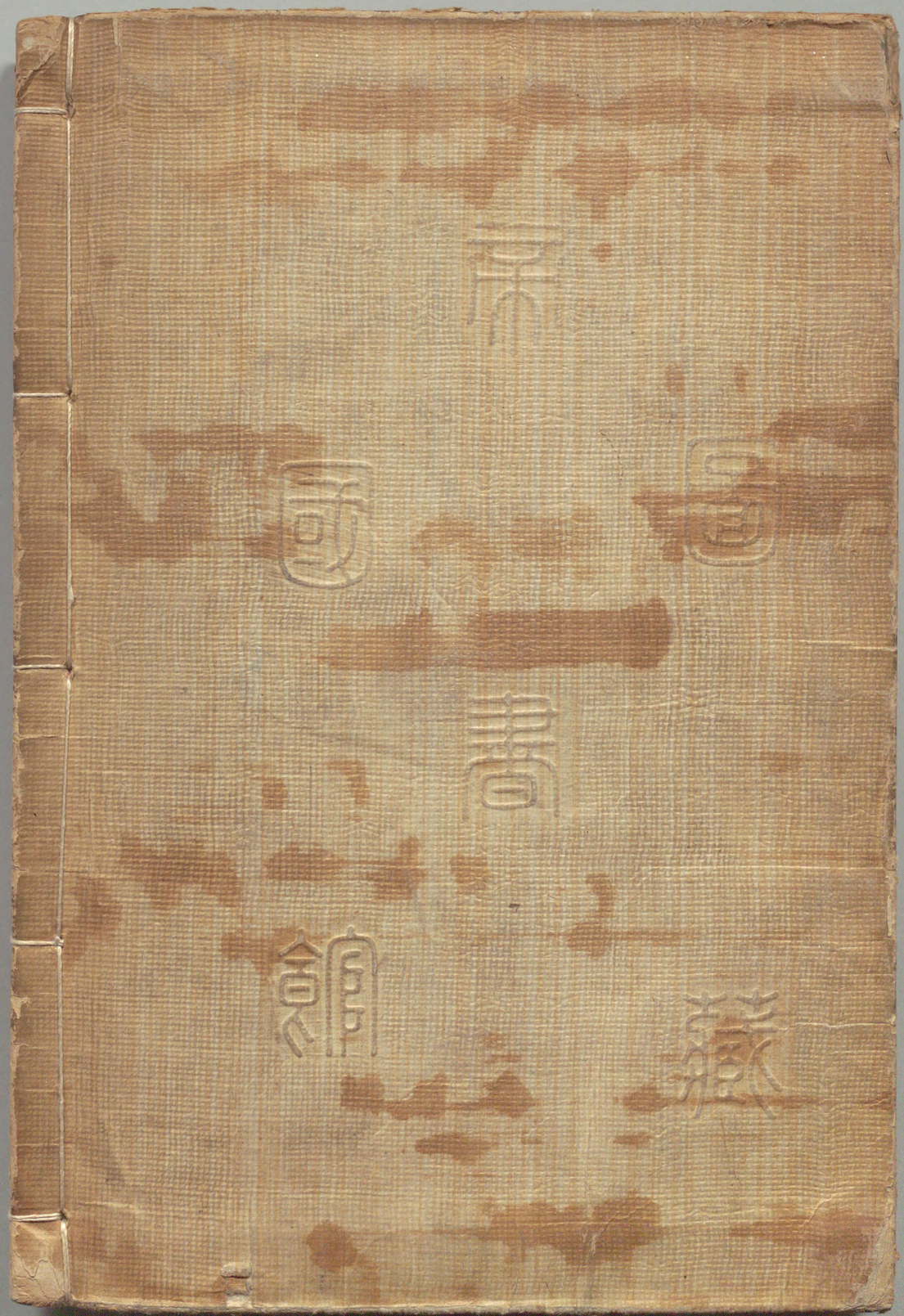
国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用

081
10
28

国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用



国立国会図書館　燕石十種. 第55-56冊　わ081-10

ガラス使用